

「南洋民族学」と松岡静雄（中村）

「南洋民族学」と松岡静雄

中村 茂生

序

松岡静雄に関しては、従来、海軍の軍人でありながら特異な経歴を持つことになった人物として伝記的に扱ったものを別にする^①と、実兄柳田国男との関係という観点から研究されてきたにすぎない^②。しかし、その業績や活動をみると、日本の民族学史・ミクロネシア研究史という観点からも興味深い人物である。松岡静雄は日本の民族学史上でどのような位置にあるのであろうか。本稿では、それを検討するための第一段階として、松岡の多彩な足跡と業績を整理し、それらの性格付けを行いたい。その作業によって柳田研究などにも若干新しい材料が提供され、日本の民族学と植民地主義といった問題を考える契機にもなるだろう。

第一章 松岡静雄の足跡

1 軍人松岡静雄

一九一四年八月、第一次世界大戦に参戦した日本は、同年十月にはドイツ領ミクロネシアの主要な島々の占領を完了した。それらの地域ではその後海軍による軍政がしかれ、一九二〇年のベルサイユ条約の発効とともに国際連盟の委任統治領となった。これにより赤道以北の旧ドイツ領ミクロネシアの事実上の領有が確定し、日本にとって台湾につぐ本格的な海外領土となった。この地域は「南洋群島」と呼ばれ、太平洋戦争開戦直前には八万人を超える日本人の移住地となり、さらには他の東南アジア諸地域への進出の足場、すなわち南進の拠点として重要な位置を占めた。

日本統治下にはいったミクロネシア地域は、すでに前世

紀の終わりにはスペインの支配下にあり、キリスト教の布教も盛んに行われていた。従って、日本人がこの新しい領土で出会った人々は、「野蛮人」でもなければ「未開人」とも言えなかった。それでも、「南洋群島」の異民族は、興り始めたばかりの日本の民族学、人類学にとって格好の調査対象となっていた。占領数ヵ月後に送り込まれた學術調査団には、すでに形質人類学者が含まれている。

松岡静雄は、このときまだ現役の海軍中佐であった。戦争中は、南遣支隊として軍艦筑波の副艦長をつとめ、東カロリン諸島のポナペ島上陸作戦では陸戦隊司令として約三百名を率いている。

占領後には守備隊八十名とともに二週間島に留まったが、これが後にミクロネシア民族研究の權威と言われる松岡の、意外にも実地調査といえる唯一の経験となった。

ポナペ滞在中、松岡が最も腐心したのは、ドイツが残した様々な資料の散逸を防ぐことであった。ポナペ島には当時、東カロリン諸島を統轄する区庁があり、植民地行政に関する書類も豊富にあったと思われる。松岡のドイツ語能力は海軍でも有数であったというが、それがここでは役立っている。集めた資料は整理し、各省庁に振り分けて送ったという話が伝わっている。松岡自身は椰子栽培に関する文献を手に入れ、翌年には早速『椰子栽培法』として翻訳出

版した。注目しておきたいのは、農商務省の石黒忠篤のこの出版に対する協力である。石黒は省内で柳田国男の後輩だった人物で、ともに郷土会の中心メンバーとして活動してきた人物である。兄柳田の官僚時代の人脈は、これ以降も松岡の活動に重要な役割を果たすことになった。

また『椰子栽培法』に先立ち、公刊されたものではないが、「南洋諸島『ポナペ』開拓に関する所見」（『南洋群島事情』所収出版年月日他不明）が残されている。一九一四年十一月十一日に司令部で講演したものとあるから、ポナペ島を引き上げた後、二十日程でまとめられたものだろうことになる。内容は、まず「ポナペ」概説として地勢から説き起こし、続いて住民の人種、言語、宗教、伝説慣習といったことを網羅する。次にドイツの統治策を失敗と断定し、その原因を分析してから、今後の日本統治方法を提案する、といった体裁である。住民について記述した部分を読むと、ドイツの統治資料の詳細な分析のうえに、幾分かの実地調査を行った形跡がある。ドイツ時代の教育の結果、ドイツ語に堪能な人々もいたし、『ミクロネシア民族誌』（一九二七岡書院）には当時商人としてポナペ島に滞在していた関根仙太郎の協力を得た旨が記されているので、住民からの聞き取りは可能であった。ドイツ語資料の引き写しにとどまらず、可能な限りポナペ島住民の現状を記そ

「南洋民族学」と松岡静雄（中村）

うという姿勢が窺われる。

また「地方行政ハ旧慣ニ従ヒ土人ノ手ニ委ネラル」というように、基本的に旧慣を利用する統治策を用いるべきだと説き、その点に関しては、ポナペ島の伝統的首長の権威を温存していたドイツの統治方法を評価した。全般に実務に徹した内容であるが、後のミクロネシア研究につながっていく視点がすでに獲得されているといつてよいだろう。

ポナペ島の経験は、後年の松岡の仕事を考えて、象徴的な出来事ではあるが、「民族学」への興味が、ポナペ島での異民族との出会いをきっかけに、突然沸き上がったというわけではない。

南洋に対する憧れについて松岡の言葉によれば、少年時代に親しんだ『椿説弓張月』にまで遡る。また、海軍兵学校に入学した明治二十年代といえ、⁽⁸⁾「南進」論を支える代表的な著作が出始めた頃である。その中で特に、明治二十六年に出版された、鈴木経勲の『南進巡航記』を、若い松岡は愛読したという。⁽⁹⁾この時期にはまた、志賀重昂、服部徹、田口卯吉らいわゆる南進論者の著作のほかに、「南進小説」ともいうべき政治的な小説が多数発表されている。明治期「南進」論のまさに最盛期である。こういった現象については、それなりの時代的基盤、国内政治的背景があったと考えられる。⁽¹⁰⁾この状況が、松岡の南洋観に与えた影響

も考慮されなければならないだろう。海軍士官になった当時の松岡の夢は、「生涯のうちに一度、大使館付海軍武官と未開地の太守になってみたい」ということだったのである。⁽¹¹⁾「未開の太守になってみたい」という考えは、ロマン的といわれる明治期「南進」論に直接つながってくるとも言える。

松岡は、一八九七年の海軍練習航海中にもポナペ島に興味を示しており、この最初の南洋体験で既に「最も心をひきしは南洋の風習言語」と記している。⁽¹²⁾この様な漠然とした関心が、日本の「南洋群島」統治という情勢を背景に、『ミクロネシア民族誌』を始めとする研究として結実したにすぎない。

軍人としての松岡は、第一次世界大戦当時既に栄達の道からはずれていたという。⁽¹³⁾戦後は大佐に昇進したものの、一九一八年十二月に予備役に編入されて引退するまでの間も、文庫主管や戦史編纂委員といった閑職についていた。健康上の理由もあったと考えられるが、松岡が海軍内部で次第に疎まれていく様子を示す挿話も少なくない。結局松岡にとって他の海軍軍人達は、「眼に文字のない船乗」⁽¹⁴⁾しか見えなくなったようである。

海軍最後の数年間には、『送假字法』（一九一五海軍令部戦史編纂）、『南溟の秘密』（一九一六春陽堂）を著して

いる。『南溟の秘密』では、ドイツ語の文献に全面的に依拠しながら、ミクロネシアの伝統的航法についてまとめている。松岡は後年、日本人の祖先の南方渡来説を展開するなかで、それが漂着などではなく、航海による移住であったと主張しているが、その根拠にはこの研究を通して得たミクロネシア人の航海技術の高さに対する認識があったと考えられる。

海軍大佐という肩書きは終生松岡につけられ、そのため退役後の仕事も、軍人松岡のものとして見做されることが多かった。松岡に『海軍の南進論者』という評価がなされるのもそのためであろう。しかしながら、実際に松岡がとった『南進論者の言動』について検討していくと、それが軍人の視点というよりは、事業家、あるいは政治家的な性格を備えたものであったことがわかる。次に見る日蘭通交調査会の活動は、その側面をよく著している。

2 日蘭通交調査会

日蘭通交調査会は、一九一六年に、『日蘭通交資料の刊行、日蘭辞典、オランダ語文法、会話書の編纂刊行、日蘭両国国情の紹介、東洋交通機関共同経営に関する調査』など、日蘭の友好促進を掲げて発足した民間団体であった。

史苑（第五五巻二号）

会は約七年間存続し、『和蘭語文典（未定稿）』（日蘭通交調査会一九一八年）、『蘭和辞典付蘭語文法要録』（日蘭通交調査会一九二一年）などを発行した他、一九二三年には調査船を仕立てて、パラオ、ジャワ、ボルネオなどを巡回している。松岡自身は、翻訳書として『爪哇史』（岩波書店一九二四年）を出版し、さらに会員向けに『南洋発展と新占領地』、『蘭印における支那過激派宣伝』、『蘭印の石油』、『米蘭油田紛議真相』といった冊子を配布している。『蘭印の石油』は、石油確保の重要性を早くから認識していた点で、一定の評価を受けている。

また松岡は一九一九年、蘭領印度、ニューギニアなどの共同開発案に関する折衝を行うためにオランダに渡っている。このオランダ旅行中、ライデン大学の日本語科教授で、ライデン博物館の元東洋部長という人物を訪ねているが、考古学についての話が出た、という程度のことしか伝わっていない。日蘭通交調査会の活動は、『南洋群島』を飛び石とみてその先にある進出地としての蘭領印度、あるいはニューギニアを想定していた。日本のミクロネシア領有を前提とした、南進論的活動であったといえる。柳田は松岡のこの事業を、『一番賛成して、一生懸命やらせたと思う』と回想している。実際、この会は実務面では、運営資金の調達をはじめ、柳田の政治力に負うところが少なく

「南洋民族学」と松岡静雄（中村）

なかった。^⑤

二人に共通していたのは、日本人の移民というテーマであり、日蘭通交調査会もそのための研究会的性格を持っていた。調査会発足の頃、貴族院書記官長の職にあった柳田にとって、日本人の移民問題は、官僚として直面する大きな課題であった。柳田の大正七年の日記には、当時柳田が評議員を務めていた日本移民協会とともに調査会の記事が頻出し、移民問題がいかに重要視されていたかが窺われる。松岡もまた移民協会の手伝いを申し出ている。^⑥調査会が移民問題への取り組みとして実際に行ったことのひとつは、東京に事務所を置く通信社を資金援助して、蘭印向けに日本びいきの記事を配信させるという一種の情報操作であった。日本人移民が受け容れられ易い環境作りを目指したもので、北米における移民排斥運動を念頭に、より周到な移民計画を意図したのである。^⑦

日蘭通交調査会を通して、松岡は学者から政治家まで様々な人物と交流している。この交流は、松岡の学問形成にも少なからず影響を与えたと考えられる。例えば調査会名簿からは、新村出、原口竹二郎、移川子之藏といった名前を拾うことができる。新村はやはり南方への視点をもった言語学者で、松岡の言語学的著作に対しても幾つかの論評を残した。^⑧原口は、台湾総督府の官房調査課にいた蘭領印度

の専門家で、『爪哇史』にも協力している。^⑨

民族学の専門家として直接松岡に影響を与えた可能性が考えられるのは、一九一九年にアメリカから帰国したばかりの移川である。移川はハーバード大学でアメリカ文化史学派のR・B・ディクソンに師事し、インドネシアの装飾美術の研究で学位を取得した。その後帰国までの間に、ハーバードから派遣されて東南アジア、東インドの調査も行っている。また松本信広や内藤吉之助ら慶應大学の史学科出身者によって結成され、柳田を師と仰ぐ地人会のメンバーでもあった。『ミクロネシア民族誌』中の伝説を扱った部分は、ディクソンの著作に依拠して書かれており、それを移川の直接の影響と即断できないことはもちろんであるが、ここではさしあたり松岡の民族学が若い学者を通して世界の民族学との接点を持ちえたことを確認しておきたい。その後、台北帝大の土俗人種学教室の中心人物となった移川が指揮した一連の『台湾蕃族』の研究に対し、松岡は期待をもって注目し続けている。

この時期の松岡は、著作を見てもわかるように、「民族学」というよりは事業への関心が中心であった。柳田は、「何かもう少し政治でもやってみたいといったような気持を持っていた」とみている。結局松岡は、事業家にも政治家にもならなかったが、自身の研究の立場から時々の日

本の政治状況に対して発言し続けた。もちろん研究テーマ自体が政治状況に沿って選ばれたという見方もできるであろうが、学問を実学として現実の世界に活かそうという姿勢を、柳田とも共通する要素として押さえておきたい。

3 その後の研究と著作群

一九二四年、脳溢血で倒れた松岡は、以後一九三六年に死去するまで神奈川県の鶴沼に隠棲し、研究と著述、さらには教育活動に専念した。この間「宿痼になやむ身であるから何時執筆不能に陥るかも知れず」という状況の中、四十冊を超える著作をものし、また「湘南国語研究会」を主宰して「湘南国語研究会誌」、「国語と民族思想」という二つの雑誌を出版している。

人類学者の清野謙次は、松岡の著作を、南洋民族学、南洋言語、日本古語古俗の三つの系統にわけ、南洋民族学の『ミクロネシア民族誌』（一九二七岡書院）、南洋言語は五種類ある兄弟本、日本古語古俗は『日本古俗誌』（一九二六刀江書院）、『古語大辞典』（一九二九刀江書院）、『紀記論究』（一九三〇—一九三三同文館）をそれぞれ代表作としてあげている。清野が依拠した松岡の著作目録は、一九四二年に海軍で催された松岡の七回忌に配布されたものだが、これには日蘭通交調査会時代のパンフレット類や雑誌

新聞に発表された論文等は含まれていない。著作の中でも、『我等が祖先の信仰』（一九二六国語書院）のような重要なものが抜けている。また先にふれた「南洋諸島ボナベ開拓に関する所見」のように、海軍関係の文書類にも研究者の取り上げていない松岡の献策、論文は少なくない。それらはいずれも松岡を研究対象とする場合には無視できないものであるが、これまで整理されてこなかった。これらの資料が揃えば、おそらく清野が分けた三系統の他に、新たな範疇を考えなければならなくなるであろう。例えば、海軍時代の著作である『送仮字法』から始まり、「漢字廃止を前提とする字音かなつかひの研究」（一九二四齊藤美文書、『日本言語学』（一九二六刀江書院）、そして晩年の国語研究会の雑誌に発表した諸論文までは、日本語の歴史、現状、将来、教育、表記法の問題を巡る研究と言える。

国会図書館蔵の齊藤実関係文書中にも、いくつか松岡の書いたものが含まれている。齊藤とは海軍時代からの付き合いがあって、病に倒れる直前には、齊藤朝鮮総督を訪ねて朝鮮旅行も行っている。興味深いのは、「治鮮策要旨」と題されたガリ版の冊子で、日付がないため書かれた時期は特定できないが、関東大震災における朝鮮人虐殺事件を受けての論評と想像されることから、一九二五年頃のものと思われる。その中で松岡は、朝鮮人は同文同種であり、

日本との融合同化は自然であるという当時の日本政府の見解に対し、自身の学問成果をふまえて批判している。松岡によると、同文同種説には言語学的にみても根拠がなく、その見地に立った融合同化の可能性はない。従って共存共栄主義に転換し、職業政策を充実させ、自治制を検討するべきだと主張する。また、宗教政策について、朝鮮での神社造営は、日本の神社信仰の本質に照らし合わせて明らかに無意味であり、既に朝鮮人社会に浸透しているキリスト教を保護し、利用すべきだという。日本の朝鮮支配の方法について批判した学者は、もちろん松岡ひとりではなかったが、同文同種という根本理念を否定した点が注目される。雑誌新聞に発表された論文等は数も多く、掲載誌も多岐に渡る。掲載誌名をみると、「民俗学術」、「旅と伝説」など、柳田との関係を窺わせるものが多い。また柳田が編集局にいた当時の朝日新聞に、伊波普猷の「おもしろそうし」評を寄せていることも興味を引く。柳田が伊波の「おもしろそうし」研究を援助していたことはよく知られているが、松岡の書評もその一環で、伊波の仕事を経験に知らしめる為の方法だったとみることできるだろう。日蘭通交調査会の活動が終わった後も、大正末年頃には、まだ柳田松岡の交流は続いていたか、少なくとも関心は一致していたということがいえる。柳田と松岡の学問上の影響関係につ

いては後述したい。

『パラウ島古俗』は雑誌『太陽』の「太平洋問題の真髓」特集に寄せた記事である。日本の統治下にはいったミクロネシアに住む人々について、「人でも取って食うた野蛮人」ではないことを世間に知らせる意図をもって書かれた記事だとある。また松岡の民族学が、失われて行くものの記録という目的意識を備えたものであったことがわかる。

『ミクロネシア民族誌』以後、松岡の研究の中心は、太平洋諸島の言語と日本の神話を対象としたものになっていく。前者の方では『チャモロ語の研究』から、中央カロリン語、マーシャル語、パラウ語、ポナペ語、ヤップ語についてそれぞれドイツで出版された研究書を全面的に参考にしながら同様の概説書を著している。この系統は『ミクロネシア語の総合研究』（一九三五私家版 一九三七岩波書店）としてまとめられた。松岡がこういった言語研究を継続したのは、「これが日本語の成立に関係する所極めて深く、ひいては日本民族の発生、文化の起原其他の問題の研究に資する重大な鍵となるべきものであると確信して居た」からであった。日本の国家と民族の起原を求めるという点で神話研究とも通じる研究であったのである。

『紀記論究』全八冊で松岡が企てたのは、古事記、日本紀の記事の内容を検討し、社会諸科学の利用にたえる資料

を検出することであつた。これを松岡は、語誌学（レキシコグラフィー）、書籍学（ビブリオフィー）と区別し、文献学と呼んだ。松岡の日本神話研究は、しばしば本居宣長の流の国学であるとか、新井白石のように記紀を歴史書とみる立場であるとされる。しかし、松岡は宣長には常に批判的であるし、記紀をそのまま史書とみることは否定した。あくまで民族学を専攻する研究者としての神話研究であつたといえよう。

第二章『ミクロネシア民族誌』の周辺

1 松岡静雄の民族学と政治

『ミクロネシア民族誌』は六百ページに及ぶ大作で、松岡の代表作である。戦前の日本のミクロネシア研究最初の業績のひとつとして評価もされている。しかし出版された一九二七年といえ、世間の南洋熱も一旦冷め、民族学という名称も一般には全く知られていなかった。刷数五百のうち、実売百、南洋庁の買い取りが百二十、残りは古書店に流れたと言われている。ただ、太平洋戦争が近づくにつれて再び盛り上がった「南進」論の中で、南洋関係の本が次々に再刊され、松岡のものも、『太平洋民族誌』が一九

四二年に、その翌年には『ミクロネシア民族誌』も再刊された。再刊『ミクロネシア民族誌』には、清野謙次による「南洋研究の先覚者松岡静雄大佐を偲ぶ」と略伝が付けられている。

『ミクロネシア民族誌』の出版に関して注目すべき点は、この本の公的性格である。序文や跋文を読めば、統治機関である南洋庁の調査協力を得たことがわかるが、実際には単なる協力ではなかった。以下は、国際連盟委任統治地域ミクロネシアの受任国として日本が、委員会に提出した年報からの引用である。

風俗習慣に関する学問的調査

島民の風俗習慣につきては、一九二五年松岡静雄氏に委嘱し、材料を収集せしめつつありしが、この程完成し一九二七年「ミクロネシア民族誌」と題し出版せり。

これによって、『ミクロネシア民族誌』は日本政府からの公式の依頼によって書かれたものだということがわかる。同じ一九二五年に南洋庁内に旧慣調査会が設置されているが、これも関連した動きと思われる。ところが南洋庁長官の横田郷助によって書かれた序文には次のようにある。

友人松岡静雄君は、言語学、民族史学の専攻家で、特に我南洋群島とは、占領当時から深い関係があり、土語、土俗に通じておられる人であるが、昨年（一九二六年）

「南洋民族学」と松岡静雄（中村）

総合的ミクロネシア民族誌編纂の意向の有ることを漏らされたので、「中略」助力もし、できるだけ材料を提^④供した。

ここでは、松岡からの申し出に南洋庁が沿うという形になっており、また年報の年号とも一年のずれがある。この点をとりたてて問題にするつもりはないが、複雑な背景があったとも考えられる。一九二三年まで国際連盟常設委任統治委員を務めた柳田の意向もありえた。

また『チャモロ語の研究』以後の言語をテーマにした著作も、南洋庁の協力を得て書かれており、郷土研究社から発行されたものと別に、南洋庁版が存在したことが知られている。いずれにせよ民族学が日本で確立していなかった時点でこのような本が出版されるには、政治との繋がりが必要であった。松岡と政治の問題を見る場合、もうひとつ見逃せない点は、太平洋戦争との関係である。先に触れたように、戦争が拡大し日本がアジア諸国に進出するにつれて、松岡の著作は書かれた当時とは異なった文脈で読み直されていく。この松岡の再発見ともいえる状況は、自分たちの「南進」論の系譜をできるだけ古く、強固なものとして位置づけたい海軍の主導でなされた。柳田や石黒忠篤、山梨勝之進といった人々が参加した松岡の七回忌は、海軍の水交社で行われ、やはり海軍からの援助で設立された太

平洋協会のメンバーによって松岡論が発表されている。太平洋協会は、戦争中の日本の侵略行為をイデオロギー面で支えることを目的とする団体で、ドイツで興った地政学の紹介を積極的に行った。松岡を「南進」の先駆者と位置づける論文を書いた清野謙次、平野義太郎らは、政治と民族学を橋渡しする役割を果たした。

平野の「わが海軍先覚による太平洋民族学の開創故松岡静雄大佐の業績」（一九四二『南洋経済研究』所収）は、後に『民族政治の基本問題』（一九四四小山書店）の中に、『異民族統治と民族学』という題で収められた。そこでは杉浦健一の「民族学と南洋群島統治」（一九四一『大南洋』太平洋協会編）を引き合いに出しながら、松岡の研究を異民族統治に貢献しうる民族学の先駆的業績として位置づけている。しかし、松岡には自分の民族学を、直接異民族統治に活かそうという意識はなかった。かつてミクロネシアの島々を日本風の名前に改名しようという動きに反対していたことから、日本の侵略的拡大を礼賛するような学問にはなりえなかったと思われる。結局平野は、松岡大佐の民俗学・民族誌学の研究の狙っていたところを言い当てていると思う^⑤。として、南洋庁長官が『ミクロネシア民族誌』序文中で述べた民族学の効用への期待の言葉を引用しなくてはならなかった。

この一連の動きは、目前の戦争に向けて駆り出された幾多の「南進」論者達、例えば菅沼貞風の場合と同じである。松岡に「南進」論者的言動があることは間違いないが、この時期の「南進」論と同列に扱われたことに直接の責任はないと思われる。日蘭通交調査会の活動にみられるように、松岡の「南進」論は事業的な意味合いが濃く、海軍の「南進」論や昭和十年以後の「南進」論とは区別されなければならない。

2 鶴沼時代の人脈

「ミクロネシア民族誌」を初め、松岡静雄の代表的な研究は、隠棲地であった鶴沼でなされている。ここでは大正末から昭和にかけての日本の民族学状況と『ミクロネシア民族誌』が生み出された背景について、数人の人物を手がかりに考えてみたい。

日本の民族学史が語られる場面で必ず言及されるのは、大正末年に岡正雄、小山栄三、古野清人ら若い研究者たちによって作られたエイプ会という集まりのことである。ここでは、エスノロジーの訳語として『民族学』という用語が適当かどうかを巡って議論が重ねられたという。岡は後年、こうした集まりに参加した人たちが、大正・昭和にかけてのわが国の近代人類学（ANTHROPOLOGY）

ETHNOLOGY PREHISTORY）の発展に、それぞれの分野で萌芽と方向づけの役割をはたした」と回想している。この年はまた柳田国男を中心に雑誌『民族』が創刊され、日本の民族学にとって画期的な年であったとされている。

松岡静雄は、『民族』には一度しか寄稿していないが、その発起人やエイプ会の主要メンバーとは交流があった。特に大正末の鶴沼に住んでいた岡正雄、内藤吉之助、田辺寿一らは重要である。『ミクロネシア民族誌』の跋文に、岡と内藤への謝辞があることは、この本の学問的背景を考察する場合には見逃せない。

内藤は松本信広、移川子之藏らとつくった三田地人会を通じて柳田ともつながりのあった人物で、『民族』にも寄稿している。エンゲルスの『家族・私有財産および国家の起源』（一九二二有斐閣）の日本最初の翻訳者でもある。

田辺はデュルケームに傾倒する社会学者で、『民族』の創刊には、岡らとともに発起人に名を連ねた。

岡は前述の通り、黎明期から確立期、さらには戦後の復興期まで日本の民族学の中心に居た人物であるが、実兄で岡書院を興した茂雄とともに、柳田松岡とは関係が深い。一九二四年に、柳田と初めて面会した場で、民族学を志すことへの激励と、フレーザーの翻訳出版に対する厳しい反

対を同時に受けたというエピソードはよく知られている。

『民族』の創刊は柳田と岡の出会いによって実現したものだが、一九二八年には不和となり、『民族』もその後廃刊となった。鶴沼在住中には、柳田に多大な影響を与えたといわれるイギリスの民俗学者ゴムの著作にバーンが増訂した概説書を『民俗学概論』（一九二七岡書院）として翻訳出版している。同書の序文には、「この学問が、一個の体系的内容を有する科学として成立することの可能に對して深き疑ひを懷く⁽³⁾」⁽⁴⁾と言ふ言葉があり、これを受けて松岡も『ミクロネシア民族誌』の跋文中で、柳田批判とも解釈できるフォークロア観を披露している。

ところで、『ミクロネシア民族誌』に岡正雄への謝辞が記されていることは前に述べた通りである。それには「本書の編述について色々の方面で助力を与えられた」とある。この助力が具体的に何を指すのか分らないが、同じく跋文中で展開されている「民族学」または「民族誌学」の提唱にもエイプ会のメンバーでもあった岡の影響を見て間違いないだろう。松岡が「民族学」という用語を使い始めるのは、おそらく一九二六年の『我等が祖先の信仰』あたりからだと思われる。『太平洋民族誌』は、その前年に出版され書名に「民族誌」と銘打っているが、方法論に関しては一切触れていない。『我等が祖先の信仰』では、「文

化圈⁽⁵⁾」という用語も使われ、ここでも岡の影響を感じさせる。岡は当時既にフレーザーからシュミット、コッパース、リバース、シュルツなどを通して民族学的世界的な流れに精通していた。その岡に加え、内藤吉之助、田辺寿一からそれぞれエンゲルス經由のモルガン、デュルケームに関する知識を得られる状況にあった鶴沼での学問的環境は、決して閉ざされた、時代遅れのものではなかった。むしろ『ミクロネシア民族誌』は、『民族』やエイプ会を生み出した日本の民族学の胎動期の一連の流れのなかで書かれた最初の著作のひとつであったとみてよいのではないだろうか。しかしながら協力した若い研究者たちは、その学史上の意味なり、松岡の役割なりに関してその後ほとんど言及していない。やはり松岡と交流があった古野清人に向けて中村孝志は、松岡の存在に注意を喚起しながら、日本民族学発達史を書き残すよう勧めている。「民族学逸史⁽⁶⁾」と題されたこの一文に留意したい。

最後に日本の民族学を陰で支えた人物に少し触れておきたい。岡茂雄は、研究者になることを断念した後、岡書院を創業し、当時ほとんど一般には需要のなかった人類学、民族学、考古学専門の出版を続けた。松岡に勧めて『太平洋民族誌』を書かせたのも岡であるし、『ミクロネシア民族誌』も、その協力なしには生まれなかったであろう。清

野謙治は、松岡と岡茂雄は「切っても切れない関係」にあるとし、松岡を著述に向かわせた功績を高く評価している。²⁴『民族』の出版元も岡書院であった。

第3章 柳田国男

1 柳田の影響

現在、一般に松岡が話題になる場合のほとんどは、柳田国男研究のひとつコマとしてである。鶴見和子は、松岡と柳田の協力関係が結実していたら、柳田の「一国民俗学」に閉じこもった方法を「ポリネシア、ミクロネシアに向かって、比し交流させてゆく方向に向かわせることに役だったかもしれない」として、²⁵「柳田研究の開かれるべき窓として」の松岡研究の意義を説いている。しかし現状では、「開かれるべき窓」が十分開かれたとは言えない。また、橋川文三は対談で、「柳田をやる場合は、弟の松岡静雄のことをもう少し調べないか」という気がする。これはどうしてかというと陰に陽に組んでいるところがあったのではなからうか」と発言し、対談相手の神島二郎が「分担関係があった」という表現で応じている。²⁶

柳田が民俗学を深めていく過程で多くの研究者と分担関

史苑（第五五卷二号）

係を保っていたことは確かである。特に大正から昭和初期にかけて、その傾向が顕著であったことを考慮すれば、松岡の学問も柳田の学問と、まさに「陰に陽に」組みながら展開したと考えて無理はない。

まず、日蘭通交調査会の活動の一環として、二人が協力して編纂したものが二点ある。『和蘭語文典』、『和蘭辞典』である。これらが作成される経過については、柳田の日記などから追跡できる。²⁷この時点では、「分担」というよりは、「共同」といふべきだろうか。『和蘭辞典』は、長く実物が見つかっていなかったために、幻の本と言われ、その存在に疑問を呈する研究者もいたが、近年発見された。この仕事を通じて柳田は、オランダ語の原書を読めるまでになった。「卓上南洋談」（柳田一九一九）はその成果をふまえて書かれている。

また柳田は、前節でも触れた国際連盟常設委任統治委員として、日本のミクロネシア統治に深く関わった。期間は一九二一年から一九二三年までで、ジュネーブで開かれた統治委員会には三回出席している。第二回以降の委員会では、各委任国が提出する年報の審査が行われた。統治委員の仕事は、主にその年報を審査することである。その作業を通じて南西アフリカを始めとする諸国の事情に接したことが、柳田を民族学に向かわせるきっかけになったとする

見方もある。実際、一九二五年には、民族学的色彩が極めて濃い雑誌『民族』を岡正雄らと始めている。この新しい傾向は、松岡の活動にも影響を与えているように見える。柳田は一九二二年、二度目の委員会で、今後委員として取り組むテーマとして、自ら民族問題及び、「土人ノ幸福トハ何ゾヤ」という問題を引き受けた。その成果として、一九二三年、柳田は自分自身最後になる統治委員会において「委任統治領における原住民の福祉と発展」という報告を行った。そこでは、原住民の福祉と発展の為には、その生活・心理を理解することが不可欠であり、その第一歩として政府が現地語の入門書にもなりうるような小冊子を作成する必要性が説かれ、さらに、民族誌的調査が行われることへの期待を表明している。柳田はこの報告の為に、第二回委員会終了後にも帰国せず、研究を続けているが、このテーマを選択した理由のひとつに、「道楽ノ学問トモ若干一致スル故」と書いていることから、具体的には、各国の植民政策から当時のヨーロッパの民族学まで研究したもののと思われる。そして、そこで発見したことのひとつが、民族誌の実際的な利用価値であり、現地語の入門書の必要性であったのではないか。

柳田の発言からは、また、当時のヨーロッパにおいても、まだそれほど民族学の政策利用は行われていなかったこと

が窺われる。アフリカを中心に民族学者が大半して調査に向かうのは、もう少し後のことである。

また『太平洋民族誌』と『ミクロネシア民族誌』は、ともに、岡茂雄の依頼をきっかけに生まれたことになっているが、時期的に見て、そこに柳田の関わりを見ることはできないだろうか。まず『ミクロネシア民族誌』は、実際の出来上りが柳田を満足させるものであったかどうかは別にして、その企画自体は、国際連盟での報告で言及した、各国に今後期待する民族誌的調査に通じている。前に触れたように、政府文書に記載されているからには、公的な性格を持っていたとも言えるわけで、柳田の提案が日本では「ミクロネシア民族誌」として結実したとも解釈できよう。また松岡は、執筆の動機として、「占領後既に十数年を経過して居るのであるから、まとまった民族誌の一冊位はあっても然るべきであると信じ」たことを上げている。これを、最も実感したのは、柳田だったはずである。統治委員会において、他の受任国は既に豊富な植民地経営経験を有しており、委員にも前総督クラスの人材をあてている中で、日本のみが、間に合わせの非専門家を送り、各国委員からの質問にも答えられないような状況があった。柳田はしばしば、委員としては審査に関して中立の立場であるにもかかわらず、日本代表を弁護する発言をしている。柳田の後任

が赴任する際には、わざわざ「植民地に関する実地調査の研究」などを事前に行うよう通達をしている。また、一九二二年の書簡では、日本の代表者に基本的な知識を与えるための参考書類を送ることを提案している。ところが、当時はまだ、ミクロネシアに関しては基礎的資料すら十分取りまとめられていなかった。南洋庁が旧慣調査会を設立して、本格的に調査を開始するのは一九二五年である。『ミクロネシア民族誌』出版の必要性を最もよく承知していたのは柳田であった。

『チャモロ語の研究』の成立については、より明白な形で柳田が関与している。この本は、炉辺叢書の中の一冊である。炉辺叢書は、晩年の回想でも「いちばん永続きしたし、また根底のできた」出版事業としても記憶されており、かなり力を入れていた。この出版に関して、柳田の判断がなかったとは考えられない。そして、松岡が書いたものは、柳田が統治委員として必要性を訴えた現地語の入門書であり、それらには市販されたもの他に南洋庁版があった。オランダ語をめぐる共同の仕事ぶりからも、松岡の語学能力には一目置いていたと見るべきで、これを南洋と元々関係の深かった松岡にまとめるよう励ましたのではないか。委任統治という方法に限界を感じ、最終的には外務省ともうまくいかなくなって、委員を辞任したが、自分の提案の

実現をこのような形で果たしたとも言える。これもある種の分担関係と言えなくもないだろう。また柳田は炉辺叢書出版の功績として、埋もれた執筆者を見つけて、民俗学の基礎になるような人にまで育てたことを上げている。このとき柳田の念頭にあったのは、伊波普猷を始めとする南島研究者達であったと思われるが、松岡をも民族学・言語学の研究者として育てていこうという思惑があったのだろうか。そうだとすれば、全くの偶然に軍人上りの素人学者によって生み出されたかのような印象のあった松岡の研究も、言わば孤児ではなく、柳田国男を柱とする草創期の日本の民族学の流れの中にある一つの業績であるということができる。

しかし柳田が書き残したものと見ると、研究者としての松岡をほとんど評価していなかったことがわかる。例えば、『日本語学』（松岡一九五〇）については、「奇抜なだけで、システムも何もなっていないかった」「『太平洋民族学』などには、「専門の学者からは、甚だ尊敬せられない本ばかりであった」といった具合である。さらに、追悼会のスピーチでも、『ミクロネシア語の総合研究』に触れ、内容が案外客観的であったのではとしたり、と学問上の評価以前の扱いしかしていない。

だが、柳田が松岡の仕事に対し、当初から批判的であっ

たかどうかは疑わしい。松岡の死後七年、あるいはそれ以上の年月を経た後に、松岡の時代よりは格段に整備された民族学の位置からの批判として、慎重に受け止めなければならぬ。

2 柳田学との関連

二十歳頃日向国の海岸に椰子の実が漂着する事ある事実から我等の祖先が此瑞穂の国に渡来せし経路を推測して一篇を草して東京日々新聞に寄せた事がある。

これは、松岡、柳田の兄である井上通泰の書いたものである。有名な柳田の椰子の実の漂着に着想を得たという日本人の南方渡来説には、意外にごく身近に賛同者が居たのである。日本人の南方起源説自体、日本人の起源論が盛んであった学界の潮流のなかではそれ程特異なものではなかったが、松岡もまた、『日本古俗誌』、紀記論究中の『高千穂時代』等で、日本人の祖先、松岡の用語に従えば、『高天原族』の南方からの日本渡来を説いている。このテーマは、三人の兄弟に共有されていたといつてよいだろう。これを折口の言うように、『古代を対象とするのは』其血がそうさせる」とみることもできよう。この側面は、松岡と柳田の学問の傾向、影響関係を考えるためには、記憶されるべき点である。

松岡が柳田に与えた影響については、既にいくつかの研究がある。まず藤井隆至は、日本人の起源を南に求めるという点で、ふたりの問題意識が共通していることを指摘し、お互いの論点が実際に重なり合う部分を列挙している。それらのうち特に、柳田にとって重要な意味を持つ「移動手段としての船」という着想が松岡の研究からもたらされたものではないかと述べている。

また池上隆祐は、後に『青年と学問』に収録された講演を聴いた印象を語った中で『ミクロネシア民族誌』の松岡との共通の興味を感じさせる部分があったとしている。結局のところ、南への関心以外に両者に影響関係はないというのが大方の見方である。しかし、その他にも検討の余地はあるのではないかと思う。ここでは柳田にとっては最も核心のテーマであり、松岡も長く取り組んだ日本の固有信仰について考えてみたい。

松岡の固有信仰研究は大正末の『我等が祖先の信仰』から始められており、最晩年の『日本固有民族信仰』（一九三八刀江書院）まで続く。『我等が祖先の信仰』には、柳田を想起させる部分がある。例えば、『我等の祖先は神の住む世界は別にあって唯随時人間界に出現するものと考えて居た』、『イへの長、ウチの長は生時家人、氏人を保護指導するように、死後に於いても其神霊によって後裔を指

導保護することを怠らぬと信じた⁽⁶⁾。

あるいは「我らが祖先の信仰は遠い昔の實在ということから出発したもので、諸の威力の淵源は結局祖霊に帰するのである」⁽⁷⁾。さらに

「人間の靈魂は神であるという思想が民族に特発したものかも知れぬが、我等の祖先は自分たちの外は神になれぬというような狭い考えをもって居なかつた」⁽⁸⁾。などに注意すると、日本の固有信仰に対する基本的認識については重

なる部分が少なくないと言えるだろう。固有信仰論についても両者の間で何らかの影響関係があつたとみてよいのではないかと思われる。柳田は後年松岡を回想する場合にも、この問題に関して一切言及していないため、松岡の固有信仰論についてどう評価していたのか、あるいはなんらかの共同研究の性格を備えたものであつたのかについての判断を下すことはできない。しかし、「陰に陽に組んだ」関係を固有信仰研究の中に見出すことも可能ではないだろうか。ふたりが兄弟という関係にあることが、興味深いところでもあり、実証的な影響関係を検討しづらくするところでもある。この点については、松岡の長男磐木氏の次のような指摘が参考になるかもしれない。これを引用してこの章の締めくくりとしたい。

この三つがいの兄弟の間には一種緊迫した関係があつたとみてよいようで、そして、それが静雄の憑かれたよ

史苑（第五五卷二号）

うな研究の原動力のひとつであつたのでは無かるうかと、筆者は考える。「中略」兄はともかく、弟の方は、常に對抗の意識を持ち、追いついて行こう、あわよくば逆に抜き返してやろうと思つていたとしても、静雄の性格からみれば不思議ではない⁽⁹⁾。

結

日本の民族学は、太平洋戦争を経て急速な変化を遂げた。戦後、「戦犯の学問」とみなされたことで、民族学という呼称を文化人類学に変更しなければならぬような事態もあつた⁽¹⁰⁾。またフィールドワークを伴わない研究は評価されなくなり、戦前から終戦後のある時期まで盛んに論争され、日本の民族学の特色でもあつた日本人の起源を巡るテーマは、いつのまにか中心的に扱うべきものではなくなつてしまつた。

これらの事情がすべて今日松岡静雄の存在を見えにくくしている。病身の松岡にフィールドワークの機会はないかつたし、鶴沼での隠棲生活中神話を通して行つた日本民族の研究は時代遅れのテーマとなり、さらに戦争中には「南進」論の先覚者に祭り上げられてしまつた。しかし松岡が実際に民族学を構想した地点に立つて見直すと、様々に興味深い点が浮かび上がってくる。

「南洋民族学」と松岡静雄（中村）

以上、松岡静雄が日本の民族学にどうか関わったか、また松岡を通しての柳田国男がどのような役割を果たしたかが、検討されるべきテーマであることが明らかになったと思う。松岡静雄を日本の民族学史上で捉えることによって、欧米とは異なる日本的な民族学の相貌が現れるだろう。

註

日本ミクロネシア協会の山口洋児氏には、多くの貴重な資料を拝見させていただき、またご教示いただきました。記して謝意を表したいと思います。

序

(一) 伝記としては、中村義彦「松岡静雄滞欧日記解題」(山川出版社一九八二年)など。柳田との関係では、柘植信行「次弟松岡静雄」(『柳田国男伝』三一書房一九八八年所収)、岡谷公二「松岡静雄と日蘭通交調査会」(『貴族院書記官長柳田国男』筑摩書房一九八五年所収)など。

第一章

(一) 松村曠、長谷部言人、柴田常恵。
(二) 松岡のボナペ滞在に関し、一年あるいは数ヶ月という説があったが、『軍艦筑波戦時日誌』(防衛庁戦史室蔵)により、

一週間であることを確認した。
(三) 石黒は松岡七回忌の追悼会で、出版の際の協力について語っている。

(四) 『旧陸海軍関係文書』中に、関根から出されたボナペ島での営業願いを、海軍中佐松岡名で許可する旨を記した書類がある。

(五) 松岡静雄『神楽舎黙語』(書物展望社一九三八年)一三八ページ

(六) 柘植信行前掲書一三七ページ

(七) 矢野暢『日本の南洋史観』(中央公論社一九七九年)

(八) 松岡静雄(一九三八年前掲書)一五一ページ

(九) 松岡はつ子「松岡静雄略伝」(『ミクロネシア民族誌』岩波書店一九四三年所収)六五〇ページ

(十) 中村義彦(一九八二年)前掲書二〇ページ

(十一) 松岡静雄(一九三八年)前掲書一四六ページ

2

(一) 後藤乾一『昭和期日本とインドネシア』(勁草書房一九八六年)二三ページ

(二) 松岡静雄「滞蘭日記」(『日蘭学会雑誌』315)

(三) 松岡静雄「南洋新占領地ノ将来」(旧陸海軍関係文書一九一九年)において松岡は南洋新占領地を東南アジア地域、ニューギニアなどへの進出のため拠点と位置づけている。

(四) 柳田国男『故郷七十年』(神戸新聞総合出版センター一九八九年)一五九ページ

(五) 柳田は台湾総督府から資金を引き出している。岡谷(一九

八五年前掲書) 一五六ページ

(六) 柳田国男「大正七年日記」(『定本柳田国男集別巻』筑摩書房一九七一年) 二九四ページ

(七) 外交文書「宣伝関係雑件日蘭通交調査会ノ部」(『外交文書館蔵』)

(八) 新村出「南方語との親縁」(『東京朝日新聞』一九四二年四月二二日) など

(九) 松岡静雄『爪哇史』(岩波書店一九二四年) ハページ

(十) 一九四二年水交社における故松岡静雄氏追悼座談会での柳田国男の発言(野口喜久子編『砂のいろ』法政大学出版局一九七五年) 七〇ページ

3

(一) 「湘南国語研究会」は一九三五年創刊で十冊、「国語と民族思想」は一九三三年創刊で五冊発行された。

(二) 清野はさらに松岡が存命していたら、第四系統として日本の国体研究がなされたであろうとしている。

(三) 松岡静雄「琉球古典の選釈『おもろそうし』のねうち」(『東京朝日新聞』一九二五年二月九日)。伊波は同年二月二三日の東京朝日新聞に「おもろ選釈に就て」松岡静雄氏に答ふ

を寄せ、松岡の意見に反論している。それによると、柳田から、両者の考えが結局は同じものであると言われたとある。

(四) 松岡静雄「パラウ島古俗」(『太陽』32(四)(一九二八年))

(五) 松岡磐木『ミクロネシア語の総合研究』序文「一ページ」

(六) 松岡静雄『紀記論究創世紀』(新興学会出版部一九三〇年) 一七ページ

史苑(第五五巻二号)

(七) 松岡静雄『紀記論究』

第二章

1

(一) 杉浦健一「対談特集社会調査」(『民族学研究』十七(一)での発言)

(二) 清野謙次「南洋研究の先覚者松岡静雄大佐を偲ぶ」(『ミクロネシア民族誌』岩波書店一九四三年所収) しかし『ドルメン』一九三三年一月号には再版の広告が掲載されている。

(三) 外務省「日本帝国委任統治地域行政年報」(一九二八年四一—四二)

(四) 横田郷助『ミクロネシア民族誌』序文(岩波書店一九四三年) 五九六ページ

(五) 松岡静雄(一九四三年前掲書) 一九ページ

(六) 平野義太郎「我海軍先覚による太平洋民族学の開創」(『民族政治の基本問題』小山書店一九四四年) 所収一四—四二ページ

(七) 「南進」論は、明治、大正、昭和の各時期によって性格が異なり、大正期は地味ではあるが商業主義的—平和進出的な側面を備えていたとされる。(矢野前掲書)

2

(一) 岡正雄「インタビュー『民族学との出会い』」(『歴史公論』一九七八年十月)

(二) 伊藤幹治「日本の文化人類学の歩み」(『文化人類学へのアプローチ』ミネルバ書房) 二九二ページ

(三) 岡正雄訳『民俗学概論』(一九二七年岡書店) 六ページ

「南洋民族学」と松岡静雄（中村）

- (四) 松岡静雄（一九四三年前掲書）六〇九ページ
- (五) 雑誌『民族』のなかで岡はしばしばエスノロジーの訳語として『民族学』を使っている。
- (六) 松岡静雄『我等が祖先の信仰』（一九二六年国語書院）一ページ
- (七) 松岡静雄（一九二六年前掲書）三ページ
- (八) 中村孝志『民族学逸史を』（古野清人古希記念論文集）一九七二年）四八四ページ
- (九) 清野謙次（一九四三年前掲書）六四三ページ

第三章

1

- (一) 鶴見和子『柳田国男集』解説（筑摩書房一九七五年）四三九ページ
- (二) 橋川文三・神島二郎「対話猛烈なる精神・柳田国男と現代」『現代思想』三（四）一九七五年）一〇三ページ
- (三) 柳田国男『大正七年日記』
- (四) 長谷川邦男『国際連盟時代』（『柳田国男伝』所収六一八ページ）
- (五) 柳田国男『国際連盟の発達』（岩本由輝『もうひとつの遠野物語』刀水書房一九八三年所収）
- (六) 柳田国男『委任統治領における原住民の福祉と発展』（岩本前掲書）二二九、二三一ページ
- (七) 柳田国男『国際連盟の発達』二二〇ページ
- (八) 海野芳郎『国際連盟と日本』（原書房一九七二年）九五ページ

2

- (九) 柳田国男（一九八九年前掲書）三二〇ページ
- (十) 柳田国男（一九八九年前掲書）一五八ページ
- (一) 井上通泰『南天荘雜筆』（春陽堂一九三〇年）一ページ
- (二) 松岡静雄『日本古俗誌』（刀江書院一九二六年）など。また同書では『高天原族』が稲作を伝えたと言っている。
- (三) 折口信夫『日本古語大辞典』序・紹介・推薦・批評（刀江書院一九二六年）
- (四) 藤井隆至『柳田国男のアジア認識』（『アジア経済』（一九七五年）
- (五) 池上隆祐『インタビュー柳田国男との出会い』（『季刊柳田国男研究』4一九七四年）
- (六) (九) 松岡静雄『我等が祖先の信仰』（一九二六年）三〇、一八、一一、一三ページ
- (十) 松岡磐木『父松岡静雄のこと』（『ひよどり凧の海』法政大学出版局一九九〇年）一六六ページ

結

- (一) 石田英一郎『民族学から文化人類学へ』（『人間を求めて—文化人類学三十年』全集第四巻筑摩書房一九七〇年）所収
- 付記 本稿は一九九二年度の早稲田大学卒業論文の一部を加筆・修正したもの。（立教大学 大学院地理学専攻博士課程前期）